

没後 70 年 笠井新也 一人と学問

会 期 2026 年 4 月 25 日 (土)
～ 5 月 31 日 (日)

会 場 美馬市立図書館

休 館 日 火曜日 (5 月 5 日は開館)、
5 月 7 日 (木)、5 月 21 日 (木)

開館時間 午前 9 時～午後 7 時 (5 月 31 日
のみ午後 5 時まで)

主 催 徳島県立博物館
美馬市立図書館



はじめに

笠井新也 (1884～1956) は現在の美馬市脇町出身で、徳島県内外において教職に就くかたわら、全国レベルの考古学・古代史研究者として、また徳島県の郷土史家として活躍しました。

邪馬台国の研究に力を注ぎ、その所在を大和 (奈良県) としました。そして、最古級の前方後円墳である全長約 280m の箸墓古墳 (奈良県桜井市) を女王卑弥呼の墓であると最初に唱えたことで有名です。徳島県内では遺跡や考古資料、民話・伝説の研究に取り組み、成果をあげました。

今年が笠井の没後 70 年にあたることから、この展示では、著作や遺稿などを通じて、改めて郷土の先覚者として笠井について紹介します。笠井の学問の世界に触れていただければ幸いです。

● 解説 ●

1 歴史研究への道

笠井新也は、1884年（明治17）、脇町に生まれました。弟に、郷土史家としてよく知られている笠井藍水（本名 高三郎、1891～1974）がいました。

少年期の笠井は、父のもとで読書に励み、地元の小学校・中学校を経て国学院（現国学院大学）に進学しました。1906年に国学院師範部を卒業した後、帰郷して県立高等女学校（現城東高校）や県女子師範学校（現徳島大学）の教師として勤めながら、歴史・民俗の研究、論文執筆に取り組みました。高等女学校の校誌、発起人の一人でもあった阿波国史談会の会誌のほか、東京人類学会や考古学会といった全国規模の学会の機関誌にも投稿していました。

2 遊学時代

笠井は、1911年（明治44）に長野県上田中学校（現上田高校）に転じ、さらに翌年には大阪府池田師範学校（現大阪教育大学）に移りました。

両校に在職中の時期にも、それぞれの地域の民俗に関心を持って活動しました。1915年（大正4）に退職した後、日本各地を巡りながら、また阿波の歴史も対象として、研究を続けました。

1916年から翌年には、郷土の先輩である人類学者の鳥居龍蔵（1870～1953）のもとで学ぶため、東京帝国大学理科大学（現東京大学理学部）の聴講生となりました。この頃、鳥居は朝鮮半島の調査に没頭して不在がちであったためか、笠井は独学に努め、関東・東北地方を旅行したり、京都帝国大学夏期講習会に参加したりすることもありました。

3 帰郷

笠井は、1917年（大正6）に帰郷し、翌年には老齢の父から家督を相続しました。そして、1919年には母校である県立脇町中学校（現脇町高校）教諭となり、以後20年間、教壇に立ち続けました。

そのかわら、1921年には徳島県史蹟名勝天然記念物調査会委員となり、史跡等の調査や保存について指導的な役割を果たすようになりました。1922年、東京帝国大学助教授となった鳥居龍蔵の県内調査に協力し、徳島県内では初の本格的な発掘調査であった、徳島市の城山貝塚の調査にも参加しました。

笠井は郷里で、精力的に邪馬台国の研究に取り組むようになりました。一方、民話・伝説を中心とした阿波の民俗研究も深めていきました。

4 集大成—邪馬台国と伝説の研究—

帰郷後、笠井のメインテーマであったのは邪馬台国の研究でした。大陸との通交ルートについて新説を示すなどして、邪馬台国の所在地を大和としました。また女王卑弥呼を、崇神天皇の時代（3～4世紀と推定）の倭迹迹日百襲姫命やまとととひももそひめのみことと考え、百襲姫命の墓といわれる箸墓古墳（奈良県桜井市）が卑弥呼の墓であるとしました。一連の考察は雑誌論文を経て、400字詰め原稿用紙1,000枚を超える「邪馬台国及卑弥呼研究」に集約されましたが、出版はかきませんでした。

一方、郷土史については、民俗研究の集大成として『阿波の狸の話』を刊行したほか、原稿用紙約1,000枚に及ぶ「阿波伝説誌」がまとめられましたが、埋もれていきました。

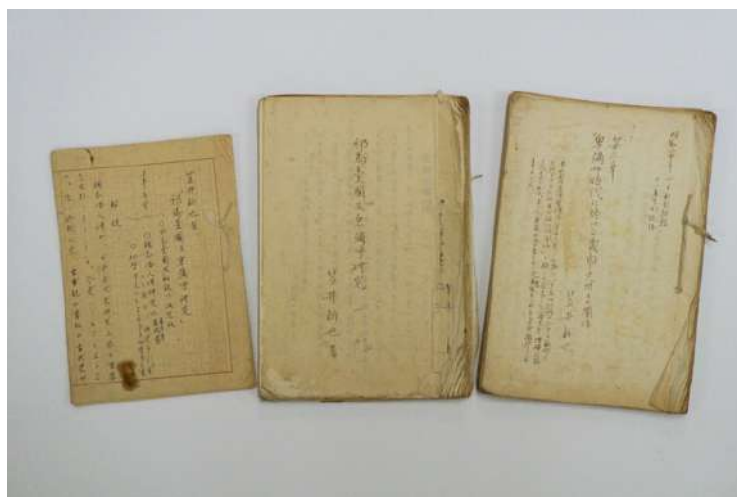
〈徳島県立博物館の笠井新也関係資料について〉

笠井新也は、原稿、著作物、筆写資料、調査ノートなどといった、研究の足跡を物語るものや、膨大な蔵書を遺しました。

これを長く守り伝えたのは、子息倭人氏わじん（1927～2022）で、自身も古代史研究者として活躍し、とくに対外関係史について成果をあげています。

徳島県立博物館では、天羽利夫氏（元館長）の仲介により、2012～18年の間、笠井家から新也の遺品を受け入れました。総数は、原稿等を含む文献資料3,500点余、考古資料100点余となっています。

これらの資料は、笠井の旺盛な研究活動とその基盤を物語るとともに、日本の歴史・考古学研究の歩みとともに、徳島県における郷土史研究の軌跡を知ることができるものとして、意義深いといえます。



邪馬台国研究に関する遺稿（一部）

● 笠井新也 略年譜 ●

西暦	和暦	事 項
1884	明治 17	現在の美馬市脇町に生まれる
1890	23	脇町尋常小学校に入学
1894	27	脇町尋常小学校を卒業 脇町高等小学校に入学
1896	29	脇町高等小学校第2学年を修了
1902	35	徳島県尋常中学校第一分校に入学 徳島県脇町中学校（明治32年、第一分校が独立）を卒業 国学院に入学
1906	39	国学院師範部国語漢文歴史科を首席で卒業 学術優等品行方正につき康熙字典1部を授与される 徳島県立高等女学校教諭心得となる 師範学校・中学校国語・漢文科、高等女学校国語科、師範学校・中学校・高等女学校歴史科の教員免許状を取得 徳島県立高等女学校教諭となる
1908	41	徳島県女子師範学校教諭となる。徳島県立高等女学校教諭を兼務（女師と高女は併設） 皇太子（後の大正天皇）行啓に際し台覧授業
1911	44	長野県上田中学校教諭となる
1912	45	大阪府池田師範学校教諭となる
1915	大正 4	池田師範学校を退職し、近畿、東海、山陽、東北などを巡る
1916	5	東京帝国大学理科大学人類学教室の聴講生となり、鳥居龍蔵のもとで人類学、東洋考古学を学ぶ
1917	6	帰郷
1918	7	父老齢のため家督を相続
1919	8	徳島県立脇町中学校教諭となる
1921	10	徳島県史蹟名勝天然記念物調査会委員となる
1922	11	鳥居龍蔵による徳島県内調査に同行、また城山貝塚調査に参加
1933	昭和 8	教頭に昇進
1939	14	徳島県立脇町中学校を退職
1948	23	徳島県立脇町高等学校助教諭となる 魏志倭人伝の研究に対し、文部省から奨励金を給付される（翌年も給付あり）
1949	24	徳島県立脇町高等学校講師となる 徳島県教育委員会から徳島県立脇町高等学校名誉教諭の称号を授与される
1952	27	徳島大学学芸学部非常勤講師となる 郡里町史編集委員会が発足し委員長に就任
1956	31	死去（享年71歳）。墓は脇町の真福寺

（天羽，2010による）

● 展示資料目録 ●

No.	資料名	数量	年代	備考
1 歴史研究への道				
1	特待生証書	1	1905年（明治38）	
2	康熙字典	1	1905年（明治38）	
3	阿波伝説物語	1	1911年（明治44）	
4	阿波口碑集録 下	1	1913年（大正2）	
5	阿波国史談会誌第2号	1	1909年（明治42）	
2 遊学時代				
6	信濃国民俗集	1		
7	故郷見聞録	1	1914年（大正3）	
8	考古学雑誌4巻4号	1	1913年（大正2）	笠井「阿波国古墳概説」掲載
9	漢委奴国王印埋没の意義に対する諸説を評す	1		
10	【参考資料】金印（複製）	1		原品：福岡市博物館蔵（国宝）
11	抄録	1	1917年（大正6）	
3 帰郷				
12	阿北伝説集 六	1		
13	脇町郷土史談 附脇町古記	1		
14	城山貝塚発掘記	1		
15	笠井新也の弟 藍水の著作	2		
16	拓本道具	1		
17	石器	20		
4 集大成—邪馬台国と伝説の研究—				
18	卑弥呼の冢墓と箸墓（提出稿）	1	1942年（昭和17）	
19	卑弥呼の冢墓と箸墓（抜刷）	1	1942年（昭和17）	
20	箸墓古墳の考古学的考察（草稿）	1	1943年（昭和18）	
21	箸墓古墳の考古学的考察（抜刷）	1	1943年（昭和18）	
22	邪馬台国及卑弥呼研究	4		13冊のうち
23	阿波の狸の話	1	1927年（昭和2）	
24	阿波の狸の話	1	2008年（平成21）	
25	阿波伝説誌	2		12冊のうち